

一カ領談



下條正男

しもじょう・まさお 長野県出身。国学院大学大学院博士課程修了。1999年から拓殖大教授を務め、2021年3月末で退官。島根県の第5期竹島問題研究会の座長を務めた竹島研究の第一人者。23年3月まで本紙客員論説委員を務めた。拓殖大名誉教授、島根県立大客員教授。76歳。

韓国ソウル市の永登浦にある「独島体験館」で11月29日まで、「二つの地図、二つの視線」と題した特別企画展が開催されている。

創立20周年を迎えた韓国の「東北アジア歴史財団」が「探検の視線から見ると、西洋の地図、統治の視線から見ると朝鮮の地図」をコンセプトにした特別展。その中で注目されているのが、1694年に官命で鬱陵島を踏査し、復命した張漢相の

韓国・体験館の特別展

「鬱陵島図」の写本で、今回が初公開だという。

于山島は独島ではない

于山島（竹嶼）があつたということになる。

これは前年の93年、幕府の許可を得て鬱陵島に渡った鳥取藩米子の大谷家の漁師らが安龍福らと遭遇し、越境侵犯の証拠として安と朴於屯を日本に連れ帰った事件と関係していた。事件を受け、朝鮮政府から現地調査を命じられた張が、復命書とともに提出したのが「鬱陵島図」である。

これが注目されるのは復命書に竹島（島根県隠岐の島町、韓国名・独島）を目撃した記述があるからだ。張は「東、海中を望めば一島あり。はるか辰（東南東）の方にあり。而してその大ささ未だ蔚島の三分の一に満たずして、三百余里に過ぎず」としていた。韓国の研究者たちは、その記述を

張が独島を朝鮮領と認識していた証拠とした。今回の特別展を「統治の視線から見ると朝鮮の地図」とする理由もここにある。

■辰の方に島なし

だが図の画像を見ると、張が「はるか辰の方にあり」とした方向に島嶼が描かれていない。描かれているのは鬱陵島の東側で、張はその島については「東方五里ばかりに一小島あり、

甚だ高大ならずして、海長竹一面に叢生す」としている。この「海長竹が一面に叢生す」る「一小島」は、朴錫昌の「鬱陵島図形」（1711年）では「所謂于山島／海長竹田」と表記されている島で、鬱陵島の東約2リにある竹嶼のことである。

竹島（独島）を遠望した張が「鬱陵島図」に独島を描かなかつたのは、朝鮮領として認識していなかったからだ。それは張が鬱陵島の疆域を「周回二百五十里許」とし、周囲約60リの一

ットでは「東国文献備考」と「萬機要覽」を載せ、そこに記載されている于山島を独島（竹島）としている。

だが于山島は独島ではない。その事実は96年に韓国の金柄烈氏との論争で明らかにしたが、今回展示された朴の「鬱陵島図形」と張の復命書でもそれが確認ができる。独島を目撃した張が「東方五里ばかり（約2リ）」とした一小島を、朴は「所謂于山島」としているからだ。これでは張が遠望した独島とは別に「所謂



鬱陵島の東約2リにある竹嶼

島と正確に把握していた事実で確認ができる。

「統治の視線から見ると朝鮮の地図」を謳った特別展だが、独島が描かれていない「鬱陵島図」では、独島を統治していた証拠にはならない。

■自ら論拠を否定

それに特別展のパンフレ

東北アジア歴史財団の創立20周年を記念した特別展だったが、張の復命書の一部を韓国語訳して「鬱陵島図」と朴の「鬱陵島図形」を展示し、于山島が独島でない事実を証明していたのである。

＝随時掲載＝

「海長竹田」「所謂于山島」の表記がある「鬱陵島図形」（ソウル大学奎章閣所蔵）

